様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２３８０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０９２０７

研究課題名（和文）在住外国人の終末期ケアの在り方に関する研究

研究課題名（英文）The research in Principles of Terminal Care for Foreigners living in Japan

研究代表者
前野　真由美（Maeno, Mayumi）

静岡県立大学・看護学部・講師

研究者番号：７０３４２０８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：在住外国人の終末期ケアのあり方を検討するために、静岡県内外国人無料検診会に受診した20歳以上の外国人を対象に終末期ケアに関する無記名式質問紙調査を行った。
対象は93名。西太平洋、南東アジア、アメリカ地域であった。思い浮かべるケアは祈りであった。自己判断ができなくなった場合の医療決定者は家族を希望していた。家族と話し合ったことがないが64.5%であった。意思を記載した書面作成に賛成は52.7%であった。療養は母国60.2%を希望していた。
家族や医療、介護福祉関係者と共に終末期ケアについて話し合うことが重要である。地域住民と共に、母語日本語併記の「６言語の終末期ケアみせてお話しノート」を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
在住外国人数は増え、高齢外国人数は増えている。研究は、在住外国人の終末期ケアの在り方の一つになると考える。外国人が、家族や大切な人、医療関係者らを含む地域住民と、平時より、互いの死生観や終末期に纏わる生活や習慣、文化、宗教、医療について話し合うことは重要である。互いに大切なものを大切にし、話し合いを続けたことは、母語であっても言語的コミュニケーションが難しくなる終末期の互いの身体をもって交わす話し合いや、互いのケアに繋がるかもしれない。その交わし続けたケア、共に生きた過程は、後の、同じように死をもつ、残された家族や大切な人、医療関係者らを含む地域住民のケア、生きるに繋がるかもしれない。

研究成果の概要（英文）：In order to examine the state of end-of-life care for foreigners living in Shizuoka Prefecture, a questionnaire survey was conducted on people aged 20 and over who attended free medical examinations in Shizuoka Prefecture.
93 respondents were from the Western Pacific, South-East Asia and American regions. The most important care that came to mind was prayer. Family members were the preferred healthcare decision-makers if the patient was no longer able to make self-decisions. 64.5% had never discussed this with their family. 52.7% were in favour of a written statement of wishes. 60.2% of the respondents wished to spend their end of life in their home country.
It is important to discuss end-of-life care together with family members, medical and nursing welfare professionals. Together with the local residents, a “6-language end-of-life care ‘Show and Talk’ Notebook” in both mother tongue and Japanese was prepared.

研究分野：看護学

キーワード：在住外国人　在留外国人　終末期ケア　緩和ケア　エンドオブライフ　病名告知　家族　地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2015 年末、在留外国人数は 2,232,189 人であり、前年より増加した。静岡県在留人は、76,081 人であり、静岡県総人口に占める外国人の割合は 2.06%であった（法務省）。日本在留外国人老年（65 歳以上）人口は 153,735 人であり、経年的に増えている（法務省）。日本における外国人死亡数は 6,871 人であり、経年的に増えている（厚生労働省）。

在住外国人は、言語、文化、習慣、医療保険の課題を抱えながら、日本に長期滞在し、高齢になる（前野ら，2008）と示唆された。診療所を対象に行った質問紙調査では、医療関係者は、言語、文化、習慣の違いから外国人患者を十分に理解できずに医療に携わっていると示唆され、医療通訳を強く求めていることが明らかになった（前野ら、2010）。外国人医療の課題は、がんの告知や精神科、救急に対応できる医療通訳者が得られないこと、互いの医療文化を含む異文化や医療保険制度が理解できていないことである（前野ら、2011）。疾病の経過に対応できる通訳者が不十分な中で、外国人は高齢になり、終末期を迎えると考えた。2011 年、静岡県在住外国人を対象に、病名告知に関する質問紙調査を行った。結果、WHO 地域割り別ではアメリカ地域が多く、外国人全員が病名告知を希望していた。また、外国人の 6 割が、現在住んでいるところで最期を迎えたいと希望していた（前野ら、2012)。2012 年、臨床看護学実習にて、学生と共に、外国人を看取ることがあった。外国人の急性期から看取りまで、ライフサイクル全てにおいてケアが求められている。

外国人のための無料健康相談と検診会（以下、外国人無料検診会）においては、1998 年から 2012 年まで、受診者の最も多い国籍はブラジルであったが、2013 年、中国になり、2015 年、外国人無料検診会の初回受診者は、バングラディシュ、ミャンマーなどから来日間もない外国人が半数となった（前野ら、2016）。2013 年、自覚症状を訴える外国人は 72.2%であり、国民生活基礎調査における有訴者の割合の 2 倍以上である。2007 年から 2010 年まで 1 位であった「腰痛」の有訴者の割合は減り、2015 年「頭痛」は 1 位となり、有訴者は、受診者の 23.6%を占めた。国民基礎調査による「頭痛」有訴者割合より、外国人受診者の「頭痛」割合は多い。在住外国人の症状は、職業に関係ある「腰痛」から、ストレスに関係するような「頭痛」に変化している（前野ら、2017）。身体的側面のみならず、こころや経済、社会、スピリチャルな側面を捉えた全人的な理解が必要となっている。

在住外国人は高齢化し、日本で死を迎えると考えた。また、自然災害の多い日本において、準備していない死に直面する可能性もある。在住外国人は生死をどう捉えているのか。終末期にある外国人患者とその家族と共にする医療関係者が、外国人患者とその家族の死生観、終末期ケアに絡む文化習慣、価値、信条、宗教などについての知見を得ておくことは重要であると考えた。

医療関係者が、患者としての外国人に関わる機会はますます増えると考える。医療関係者は終末期に関わる。医療関係者は、自然災害や人為的な災害による誰もが準備しておらず納得しがたい死のケアにも深く関わっていく。WHO は、緩和ケアは身体的、心理・社会的、スピリチュアルの苦痛に対しての全人的ケアが必要であると提唱している。言語コミュニケーションの障がいがある、習慣や文化、宗教の違いがある、医療の違いがある、異国の地で最期となる外国人の死に関する考えを知り、外国人の考えを尊重しながら、外国人と話し合いながら、医療関係者と外国人が共に死に向かうケアの過程は、在住外国人と医療関係者の安心、安全に繋がり、安寧や平和へと繋がるのではないか。在住外国人の終末期ケアを考える一資料となるようにしたい。

２．研究の目的

本研究の目的は、静岡県在住外国人が考える終末期ケアを明らかにし、外国人を含む地域住民と共に、外国人の尊厳ある終末期ケアを見出すことである。目的を達成するために 3 つの段階を設定した。

（１）静岡県中部在住外国人を対象に行う外国人無料検診会に受診した外国人を対象に、治る見込みのない疾患になった場合を想定し、①想起するケア、②事前意思表示書面や病名告知、療養の場等の希望、③大切なものや心配事、④希望する医療等に関する質問紙調査を行い、在住外国人が考える終末期ケアを明らかにする。

（２）（１）から得られた結果を基に、地域住民（医療関係者、福祉・介護サービス従事者、医療通訳者、外国人、外国人支援者）参加型ワークショップを行い、在住外国人の尊厳ある終末期ケアの方向性を見出す。

（３）（１）（２）から得られた意見や方向性から、「在住外国人の終末期ケア」に役立つ小冊子を作成する。地域住民より、小冊子の評価を得る。

３．研究の方法

（１）在住外国人が考える終末期ケアを明らかにする。

①対象者

2017 年、外国人無料検診会を受診者した 20 歳以上の外国人 114 人。

②調査方法

無記名式質問紙調査。通訳者が待機した。

③調査項目
③‐1.次を参考にし、調査項目を作成した。外国人医療経験のある医療関係者で作成した。
ⅰ．厚生労働省：人生の最終段階における医療に関する意識調査，2014.
ⅱ．厚生労働省：終末期医療に関する調査，2010.
ⅲ．前野真由美他：静岡在住外国人の国籍別にみた緩和ケアに関する考え，日本国際保健医　療学会第31回西日本地方会，2013.
③‐2.調査項目は次のとおりである。（複数回答法）以外は単一回答法である。
ⅰ．想起する疾患や状況、症状とケア
　想起する終末期の疾患や状況、想起する症状、症状に対する想起するケア（複数回答法）
ⅱ．人生の終末期における本人の希望
　家族との話し合い、事前の意思表示の書面作成、自己判断ができないときの判断者、病名告知、病名告知の方法、治療の決定方法、暮らしたい国、過ごしたい場所
ⅲ．人生の終末期における価値・心配事
　大切なもの、日本での療養する際の心配事（複数回答法）
ⅳ．人生の終末期における希望する医療
　医療用麻薬の使用、事故や災害時の輸血、心肺停止の際の治療、脳死の際の延命治療、臓器提供
ⅴ．希望する葬儀や埋葬の場所
ⅵ．基礎データ
　国籍、年齢、性別、宗教、同居家族、近所付き合い、医療保険、職業（複数回答法）、健康状態、かかりつけ医、服薬状況、身近な人の死
ⅶ．緩和ケアを知っているか
ⅷ．医療についての希望や意見（自由記載）
④質問紙の言語と翻訳
ⅰ．質問紙の言語は7言語。ポルトガル語、スペイン語、フィリピノ語、中国語（簡体字）、インドネシア語、英語、日本語
ⅱ．医療通訳経験者が、翻訳と逆翻訳（back-translation）を行った。
⑤分析
　記述統計。調査項目の比率をみた。SPSS　Statistics22を用いた。
⑥倫理的配慮
ⅰ．静岡県立大学研究倫理審査会にて承認(29-18)。
ⅱ．常葉大学研究倫委員会にて承認（研静17-18)。
ⅲ．外国人無料検診会実行委員会にて協力の同意を得た。
ⅳ．受診者には、文書にて、次を説明した。匿名化して公表する。研究への参加意思は質問紙を返却したことによってみなす。
（２）（１）を基に、地域住民参加型ワークショップを行い、在住外国人の尊厳ある終末期ケアの方向性を見出す。
①テーマは、「『日本に住む外国人の終末期ケア』のことを話しましょう」である。
②参加者は、医療関係者、福祉・介護サービス従事者、医療通訳者、外国人、外国人支援者である。
③内容は（１）の結果を発表し、その後、テーマに関して話し合いを行う。
（３）（１)、（２）から得られた結果より、在住外国人の終末期ケアに繋がる小冊子を作成する。
（４）（３）で作成した小冊子を発表し、地域住民より、小冊子の評価を得るための会を設営する。会終了後に、小冊子の評価に関する簡易的なアンケートを行う。

４．研究成果
（１）在住外国人が考える終末期ケア　調査結果
　在住外国人が考える終末期ケアを明らかにした。外国人無料検診会受診者20歳以上114人に質問紙を配布した。回収は96人であった。そのうち、記載が3分の1以下である3人を除外した。分析対象は93人である。
①在住外国人の基礎データ
ⅰ．国籍n=93は、WHO地域割り別でみると西太平洋39.8%、南東アジア30.1%、アメリカ19.4%、ヨーロッパ2.2%、アフリカ1.1%、不明7.5%である。
ⅱ．年齢n=93は、多い順から、30～39歳37.6%、20～29歳30.1%、40～49歳14.0%、50～59歳6.5%、60～69歳6.5%、80歳以上1.1%、不明4.3%である。性別n=93は女性66.7%、男30.1%、不明3.2%である。
ⅲ．宗教n=93は、キリスト教44.1%、仏教17.2%、イスラム教12.9%、なし12.9%、その他7.5%、不明5.4%である。その他はヒンズー教等である。
ⅳ．同居家族n=93は、あり74.2%、なし21.5%、不明4.3%である。近所付き合いn=93は、あり66.7%、なし30.1%、不明3.2%である。
ⅴ．医療保険n=93は、あり82.8%、なし11.8%、不明5.4%である。
ⅵ．職業（複数回答法）n=93は、多い順から、仕事46人、家事25人、学生22人である。
ⅶ．現在の健康状態n=93は、よい45.2%、ふつう45.2%、わるい3.2%、不明6.5%である。

viii. かかりつけ医 n=93 は、あり 21.5%、なし 74.2%、不明 4.3%である。服薬 n=93 は、あり 24.7%、なし 69.9%、不明 5.4%である。
ix. 最近 5 年間の身近な人の死の経験 n=93 は、あり 38.7%、なし 54.8%、不明 6.5%である。
②想起する疾患や状況、症状とケア
ⅰ. 想起する終末期の疾患や状況 n=93 は、自然災害（地震など）21.5%、末期がん 18.3%、重度の心臓病 16.1%、重度の呼吸器疾患 7.5%、交通事故 7.5%、重度の脳血管障害 3.2%、その他 10.8%、不明 15.1%である。
ⅱ. 想起する症状 n=93 は、痛み 32.3%、呼吸困難（息苦しさ）24.7%、倦怠感（身のおきどころがないだるさ）24.7%,その他 3.2%、不明 15.1%である。
iii. 症状に対する想起するケア（複数回答法）n=93 は、多い順から、お祈りをする 38 人、マッサージをする 29 人、そばにいる 21 人、話をする 18 人、音楽を流す 12 人、体を整える 11 人、さする 7 人である。
③人生の終末期における本人の希望
ⅰ. 家族との話し合い n=93 は、ある 32.3%、ない 64.5%、不明 3.3%である。
ⅱ. 事前の意思表示の書面の作成 n=93 は、賛成 52.7%、反対 1.1%、わからない 40.9%、不明 5.4%である。
iii. 自分で判断ができないときの代わりの判断者 n=93 は、配偶者 50.5%、親 17.2%、子ども 10.8%、兄弟姉妹 5.4%、医療者 4.3%、いない 4.3%、その他 2.2%、不明 5.4%である。
iv. 病名告知 n=93 は、知りたい 74.2%、知りたくない 8.6%、わからない 11.8%、不明 5.4%である。
iv‐1. iv. の知りたい n=69 のうち、家族に同席してもらい知りたい 50.7%、自分だけに知らせてほしい 44.9%、家族から知らせてほしい 1.4%、その他 1.4%、不明 1.4%である。
ⅴ. 治療の決定を誰と決める n=93 は、配偶者と 50.5%、自分一人で 25.8%、親と 6.5%、子どもと 3.2%、兄弟姉妹と 2.2%、医療者と 1.1%、その他 4.3%、不明 6.5%である。
vi. 暮らしたい国 n=93 は、母国 60.2%、現在住んでいるところ 30.1%、その他 5.4%、不明 4.3%である。
vii. 過ごしたい場所 n=93 は、自宅 79.6%、病院などの医療施設 7.5%、特別養護老人ホームなどの福祉施設 4.3%、その他 5.4%、不明 3.3%である。
④人生の終末期における価値・心配事
ⅰ. 一番大切にしたい n=93 は、家族 83.9%、宗教 10.8%、その他 3.2%、不明 2.2%である。
ⅱ. 日本での療養する際の心配事（複数回答法）n=93 は、多い順に、お金（医療費など）49 人、ことば 42 人、習慣や文化の違い 15 人、家族 12 人、食事 7 人、宗教 5 人である。
⑤人生の終末期における希望する医療
ⅰ. がんの痛み緩和のための医療用麻薬の使用 n=93 は、希望する 67.7%、希望しない 30.1%、不明 2.2%である。
ⅱ. 事故や災害の際の必要時の輸血 n=93 は、受ける 87.1%、受けない 8.6%、不明 4.3%である。
iii. 心肺停止の際の心臓マッサージや AED、人工呼吸や人工呼吸器をつける治療 n=93 は、希望する 84.9%、希望しない 10.8%、不明 4.3%である。
iv. 脳死の際の延命治療 n=93 は、希望する 41.9%、希望しない 52.7%、不明 5.4%である。
ⅴ. 臓器提供 n=93 は、希望する 43.0%、希望しない 21.5%、わからない 28.0%、不明 7.5%である。
⑥希望する葬儀や埋葬の場所
ⅰ. 葬儀 n=93 は、母国 59.1%、現在住んでいるところ 26.9%、行わない 4.3%、その他 4.3%、不明 5.4%である。
ⅱ. 埋葬（お墓）n=93 は、母国 64.5%、現在住んでいるところ 12.9%、行わない 8.6%、その他 6.5%、不明 7.5%である。
⑦緩和ケアのことば
ⅰ. 緩和ケアのことばを聞いたことがある n=93 は、はい 16.1%、いいえ 61.3%、不明 22.6%である。
（2）地域住民参加型ワークショップ
2019 年 1 月 27 日、テーマ「『日本に住む外国人の終末期ケア』のことを話しましょう」を開催した。（1）質問紙調査の結果を報告し、その後、参加者で、「日本に住む外国人の終末期ケア」について話し合い、在住外国人の尊厳ある終末期ケアの方向性を話し合った。
（3）地域住民と共に「新型コロナウイルス感染症拡大防止対策‐8 言語の健康チェック表‐」を作成
2020 年、大学教員と地域住民（医療関係者、福祉・介護サービス従事者、医療通訳者、外国人、外国人支援者）と共に、病院や診療所を受診する際、また、幼稚園や保育所に登園する際に必要な母語と日本語併記の「新型コロナウイルス感染症拡大防止対策‐8 言語の健康チェック表‐」を作成した。2021 年、病院施設に入る医療通訳者、外国人支援者らを対象に、作成した 8 言語の健康チェック表の使用方法、感染予防対策の講義等の内容の勉強会を開催した。参加者の多くが、ボランティアとして、後日、外国人無料検診会に参加した。外国人無料検診会での感染者は 0 人であった。
（4）地域住民と共に、小冊子「6 言語の終末期（もしものとき、エンディング）ケア『みせて

お話し』ノート」を作成
（1）（2）（3）の結果より、次を考え、小冊子「6 言語の終末期ケア『みせてお話し』ノート」を作成した。医療関係者、福祉・介護サービス従事者、医療通訳者、外国人、外国人支援者、大学教員等、地域住民と共に作成した。
①外国人と家族や大切な人と話し合うための小冊子
ⅰ.「病名告知」、「治療の決定」、「代わって判断する」と「家族」
外国人の一番大切にしたいは家族である。病名告知の際には、家族に同席してもらい知らせてほしい。治療の決定は、家族と決めたい。自分で判断ができないときに代わって判断する者は家族と希望している。その一方で、家族との話し合ったことがない。事前の意思表示の書面の作成には賛成である。これらのことから、家族や大切な人と、終末期ケアについて話しをすることが重要である。また、書面作成に賛成であることから、終末期ケアに関する事柄を記した書面をみながら話し合うことができるとよいと考える。
②医療関係者、福祉・介護サービス従事者、外国人支援者、地域住民と話し合うための小冊子
ⅰ. 症状に対する想起するケアとしての「祈り」
宗教がある者は 8 割である。キリスト教、仏教、イスラム教である。症状に対するケアは、お祈りをするが最も多い。外国人のスピリチュアルを基にしたスピリチュアルケアの話し合いが必要である。
ⅱ.「終末期は母国で暮らしたい」、「葬儀や埋葬は母国を希望する」と「病名告知」
西太平洋、南東アジアの外国人が多くなっている。母国での療養希望者が半数以上である。また、母国での葬儀、埋葬の希望者も半数以上である。母国がアメリカ地域の外国人より近く、帰路の距離や時間が短い。しかし、帰国するための体力は必要であり、医療関係者は告知の時期を含め、外国人とその家族とあらかじめ話し合う必要があると考える。
ⅲ. 母国と日本の医療に対する考えの違い
がんの痛み緩和のための医療用麻薬の使用を希望する者は多いが、一方で、希望しない者は 3 割いる。臓器提供希望者は 4 割いる。緩和ケアのことばを聞いたことがない 6 割である。母国の医療と日本の医療との違いがあるかもしれない。日本での療養する際の心配事の 1 位はお金である。
終末期ケアに関する事項が具体的に書かれた書面をみながら、医療関係者、福祉・介護サービス従事者、外国人支援者、地域住民と、話し合うとよいと考える。
③母語と日本語を併記し、日本人と外国人が共に同じ文章を読むことができる、医療通訳者が通訳しやすい小冊子
母語と日本語併記の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策‐8 言語の健康チェック表‐は、外国人と医療関係者が短時間でチェックすることができている。「6 言語の終末期ケア『みせてお話し』ノート」は、外国人と医療関係者、福祉・介護サービス従事者、外国人支援者、地域住民、互いの考えを知り、話し合うことに繋がると考える。通訳者は、双方の言語があることによって、確認しながら通訳ができると考える。日本での療養する際の心配事の 2 位はことばである。終末期では、日本語より母語の方が聴こえやすく、わかりやすいのではないだろうか。祈りにもことばが関係しているのではないか。ことばそのものにケアがあるかもしれない。最期の時まで聴覚は残るという。互いのことばを大切にするは、互いにケアすることに繋がるかもしれない。
④来日する前より、来日後も、平時にも、話し合うことができる小冊子
外国人の想起する終末期の疾患や状況は、自然災害（地震など）が一番である。予測しがたい地震や水害、自然災害のある日本において、来日前より、母国に残る家族や大切な人と話し合える、また、来日後も、話をしたくなったときに使えるようにと考えた。
（5）小冊子「6 言語の終末期ケア『みせてお話し』ノート」の紹介とその評価
①「外国人の終末期ケアを考える会」(2022 年 9 月 11 日、於：静岡市地域福祉共生センター「みなくる」）にて、6 言語の終末期ケア『みせてお話し』ノート」を紹介した。
②参加者は 16 名である。英語通訳者、ポルトガル語通訳者、スペイン語通訳者、インドネシア語通訳者、看護師、保健師、歯科衛生士、介護福祉士、社会福祉士、介護支援専門員、民生委員、大学教員、大学生、外国人を支援する NPO 所属者、ボランティア団体所属者である。新型コロナ感染症拡大防止のため参加者数 20 名以下の会の設営であった。
③アンケート結果
「6 言語の終末期（もしものとき、エンディング）ケア『みせてお話し』ノート」を紹介し、会終了後に簡易的なアンケートを行った。アンケート配布 15 人。回答者 13 人。
ⅰ.「みせてお話し」ノートは使えそうですか n=13 は、はい 12 人、いいえ 0 人、わからない 1 人である。ⅱ.「みせてお話し」ノートを、フリーダウンロードにしたら、使いやすいと思いますか n=13 は、はい 12 人、いいえ 0 人、わからない 1 人である。ⅲ.「みせてお話し」ノートは、関心のある人に、手にとってもらえる、と思いますか n=13 は、 はい 9 人、いいえ 0 人、わからない 4 人である。ⅳ. みせてお話し」ノートは、外国人の終末期ケアに繋がると思いますか n=13 は、はい 11 人、いいえ 0 人、わからない 2 人である。
2011 年、2012 年、静岡県在住外国人対象に行った病名告知、告知方法、過ごしたい国（前野ら）と違う。外国人ひとりひとりと家族や大切な人、医療関係者を含む地域住民と、平時より、互いの死生観や終末期に纏わる習慣、文化、宗教、医療について話し合うことは重要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 原 華代、前野 真由美、形岡 洋光、岩﨑 圭介、榎本 信雄	４．巻 9
２．論文標題 静岡県・外国人のための無料健康相談と検診会におけるCovid-19流行状況下の情報提供手段に関する検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東海公衆衛生雑誌	６．最初と最後の頁 98～103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24802/tpha.9.1_98	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 原華代，前野真由美，岩﨑圭介	４．巻 なし
２．論文標題 第23回外国人のための無料健康相談と検診会　検診結果報告	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第23回外国人のための無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 7‐8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原華代，形岡洋光，前野真由美	４．巻 なし
２．論文標題 第23回外国人のための無料健康相談と検診会　アンケート集計結果	５．発行年 2021年
３．雑誌名 第23回外国人のための無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 9‐10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原華代，前野真由美，榎本信雄，北島和子，岩﨑圭介	４．巻 なし
２．論文標題 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　検診会結果報告	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 9－20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美、原華代	４．巻 なし
２．論文標題 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　検診会受診者アンケート集計結果	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 21－23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美、原華代	４．巻 なし
２．論文標題 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　アンケート集計比較（過去17回分）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第22回外国人のための無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 24－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美，榎本信雄，北島和子，岩﨑圭介，前野竜太郎，原華代	４．巻 なし
２．論文標題 第21回外国人のための無料健康相談と検診会　検診結果報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第21回外国人無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 8－20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美，山本香，原華代	４．巻 なし
２．論文標題 第21回外国人のための無料健康相談と検診会　検診会受診者アンケート集計結果	５．発行年 2019年
３．雑誌名 第21回外国人無料健康相談と検診会　報告集	６．最初と最後の頁 21－23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 水野かほる，高畑幸，坂巻静佳，濱井妙子，前野真由美，森直香	４．巻 第18巻第1号
２．論文標題 静岡県における医療通訳の現状と課題‐学際的アプローチからの知見‐	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）	６．最初と最後の頁 67－85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 前野真由美、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介、前野竜太郎、山田隆之	４．巻 なし
２．論文標題 第20回外国人のための無料健康相談と検診会　検診結果報告	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第20回外国人のための無料健康相談と検診会報告集	６．最初と最後の頁 p8-p19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美	４．巻 なし
２．論文標題 第20回外国人のための無料健康相談と検診会　検診会受診者アンケート集計結果	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第20回外国人のための無料健康相談と検診会報告集	６．最初と最後の頁 p20－p22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 前野真由美、前野竜太郎、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介	４．巻 なし
２．論文標題 静岡県在住外国人の終末期ケアに関する捉え方	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第33回日本国際保健医療学会　東日本地方会　プログラム・抄録集	６．最初と最後の頁 p45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 前野竜太郎、前野真由美、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介、高畑幸	4．巻 なし
2．論文標題 静岡県在住外国人の終末期に関する医療の決定や生活に対する希望ー質問紙調査より	5．発行年 2018年
3．雑誌名 第33回日本国際保健医療学会学術大会　プログラム・抄録集	6．最初と最後の頁 p88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高畑幸、前野真由美（他38名）,	4．巻 なし
2．論文標題 2018　静岡市・駿河共生地区　共生のまちづくりに関する住民意識調査　報告書	5．発行年 2019年
3．雑誌名 2018　静岡市・駿河共生地区　共生のまちづくりに関する住民意識調査　報告書	6．最初と最後の頁 p1－p62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 前野真由美，原華代，高畑幸，永倉みゆき，岩﨑圭介，榎本信雄
2．発表標題 新型コロナウイルス感染症拡大防止を目的とする医療通訳者および外国人支援者向けの勉強会の開催
3．学会等名 第36回　日本国際保健医療学会東日本地方会
4．発表年 2022年

1．発表者名 前野真由美，高畑幸，永倉みゆき，原華代，榎本信雄
2．発表標題 静岡県の地域住民によるコロナウイルス感染症拡大予防のための「8言語の健康チェック表」の作成と公開
3．学会等名 日本国際保健医療学会　第35回東日本地方会（3日目）
4．発表年 2021年

１．発表者名 原華代、前野真由美、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介
２．発表標題 静岡県中部地区在住外国人の労働時間・睡眠時間の現状と今後の課題
３．学会等名 第38回日本国際保健医療学会西日本地方会
４．発表年 2020年

１．発表者名 前野真由美、前野竜太郎、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介
２．発表標題 静岡県在住外国人の終末期ケアに関する捉え方
３．学会等名 日本国際保健医療学会第33回東日本地方会
４．発表年 2018年

１．発表者名 前野竜太郎、前野真由美、榎本信雄、北島和子、岩﨑圭介、高畑幸
２．発表標題 静岡県在住外国人の終末期に関する医療の決定や生活に対する希望ー質問紙調査より
３．学会等名 第33回日本国際保健医療学会学術大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

1. 前野真由美，他：6言語の終末期（もしものとき、エンディング）ケア「みせてお話し」ノートを作成，静岡県立大学HP，2022，https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/news/20220916/
2. 前野真由美，他：‐新型コロナ感染症拡大防止対策‐8言語の健康チェック表を作成，静岡県立大学HP，2020，https://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/news/20201127-2/
3. 前野真由美，他:チラシ　９月11日研究発表会「在住外国人の終末期（もしものとき、エンディング）ケアを考える」，静岡県立大学HP，2022，http://coc.u-shizuoka-ken.ac.jp/events/kenkyu_0911/index.html
4. 前野真由美，他:チラシ　第２回　医療通訳者および外国人支援者向け　新型コロナウィルス感染症拡大防止の勉強会（会場開催），静岡県立大学HP，2021，http://coc.u-shizuoka-ken.ac.jp/events/lec_211107/index.html
5. 前野真由美，他:チラシ【WEB開催】医療通訳者および外国人支援者向け　新型コロナウィルス感染症拡大防止の勉強会，静岡県立大学HP，2021，http://coc.u-shizuoka-ken.ac.jp/events/lec_210822/index.html
6. 前野真由美，前野竜太郎：チラシ『日本に住む外国人の終末期ケア』のことを話しましょう，外国人医療を考える会HP，2019，http://www.medforesi.jp/
7. 前野真由美，前野竜太郎，他：静岡県在住外国人の国籍別にみた緩和ケアに関する考え‐質問紙調査より‐，日本国際保健医療学会第31回西日本地方会，p43，2013.
8. 前野真由美，前野竜太郎，他：在日外国人の望む病名告知と告知方法，第17回日本緩和医療学会学術大会，プログラム・抄録集，p449，2012.

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	前野　竜太郎 (Maeno Ryutaro) (50347184)	常葉大学・健康科学部・准教授 (33801)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関